

ビタミンの発見

鈴木梅太郎

日本農芸化学会を創立し、その発展の基礎を作った農学者鈴木梅太郎（1874～1943年）は、脚気予防・治療に玄米食が有効であることに着目し、1910年米ぬかから抗脚気因子としてアベリ酸を発見した。更に研究を深め、有効成分の単離に成功し、1912年これにイネの学名 *Oryzasativa* にちなんでオリザニン *Orizinin* と名づけ未知の栄養素であることを主張し、脚気の原因をオリザニンの欠乏であると報告した。しかし鈴木がオリザニンの発見は医学界から無視された。医者でも薬学者でもない農学者が難病の原因を突き止められる訳がないと思われ、百姓学者と嘲笑された。鈴木がオリザニン発見から1年後、ポーランドのカシミール・フンク *Casimir Funk*（1884～1967年）がロンドンのリスター研究所で米ぬかから鳥類白米病に有効な物質を発見したと発表し、これに生命 *vita* に必要なアミン *amine* という意味からビタミン *vitamine* と名づけ、彼のほうが第一発見者と記録された¹⁾。

当時の日本の軍隊では脚気が猛威を振るい、一端患者が出始めると次々と患者が増えていくことから脚気は伝染病という見方が有力で、西欧にはなくアジアにだけ存在するため、風土病だと考えられていた。陸軍軍医の森 林太郎（森 鷗外，1862～1922年）は脚気の原因を細菌による感染症説を主張し、海軍軍医の高木兼寛（1849～1920年）と対立した。高木は、脚気の原因をタンパク質不足と考え、白米ではなくパン（後に麦飯）を中心とした食事をとれば脚気にかからないことを証明した。高木兼寛の生まれ故郷宮崎県高岡町^{ひかさ} 穆佐には、高木をビタミンの父として顕彰する碑があることは本誌2007年7月号で紹介した²⁾。

高木の信念が「医学は実学であり、何よりも病気の予防・治療のため」のものであるならば、鈴木が「基礎から応用へではなく、応用から基礎へ」の逆転の発想がビタミンの発見に結びついた³⁾。

その後鈴木は、ビタミン学説の確立に力を注いだ他、米を原料としない合成酒の製造、ビタミンAの製品化、防腐剤サリチル酸の国内開発等、数々の業績を残し、逝去直前の1943年4月に文化勲章を受章し、没後50年の記念切手（写真1）の発行からも鈴木が偉業が偲ばれる。

出身地である静岡県では彼の業績を顕彰し、「鈴木

鈴木梅太郎 農芸化学者

没後50年



写真1 鈴木梅太郎記念切手



写真2 鈴木梅太郎胸像（静岡県立大学谷田キャンパス）



写真3 鈴木梅太郎顕彰碑（多磨霊園：鈴木家の墓）

梅太郎博士顕彰会」が毎年県内の中学・高校生の優れた理科研究論文に対して「鈴木梅太郎賞」を贈っている。静岡県立大学谷田キャンパスには鈴木が胸像（写真2）や顕彰碑が建立されている。

鈴木が墓所は多磨霊園にあり、戒名は理網院殿釋梅軒大居士。墓所入口には正面に向けて、左側に門下生から贈られた「鈴木梅太郎先生碑」（写真3）が建つ。「ニワトリの脚気」の研究報告書で、米ぬかに治療の効果のある栄養素の存在を示唆したクリスティアーン・エイクマン *Christiaan Eijkman*（1858～1930年）が1929年にノーベル生理学・医学賞を受賞している。米ぬかから治療の効果のある栄養素を分離・抽出し発見した鈴木梅太郎がノーベル賞に輝かなかった理由が釈然としない。

参考資料

- 1) 鈴木 昶, 日本医科列伝, 355-358, 大修館書店 (2013)
- 2) 諸澄邦彦, 東京慈恵会医科大学, *Isotope News*, No.639, 22 (2007)
- 3) 荒井綜一, ビタミン B1 発見・鈴木梅太郎が遺したもの, 化学と工業, vol.65-7, 539-540 (2012)

(日本診療放射線技師会 諸澄邦彦)